Osaka University Knowledge Archive

Title	谷崎潤一郎作品の研究 : 寓意としての母性をめぐって
Author(s)	張, 麗静
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/60051
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【11】

氏　　名	張（チョウ）　麗（レイ）　静（セイ）（Zhang Lijing）
博士の専攻分野の名称	博　士（文学）
学　位　記　番　号	第　２６０５４　号
学位授与年月日	平成25年３月25日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**谷崎潤一郎作品の研究　―寓意としての母性をめぐって―**
論文審査委員	（主査） 教　授　出原　隆俊 （副査） 教　授　加藤　洋介　　講　師　合山林太郎

論　文　内　容　の　要　旨

本論は、谷崎作品のうち、＜母性思慕＞の観点で論じられてきたものの中から四つの作品を対象として、その分析を息子の視点で終始するのではなく、語り手の視点や同時代のフェミニズムの動向なども踏まえつつ、総体として母がどのように描かれているかを考察し、作品の新たな読みに到達しようとするものである。

「第一章　『不幸な母の話』における母子の関係―「私」の認識をめぐって―」は、先行研究の少ないこの作品の重要性を指摘し、「私」が母と兄の葛藤を語る構造と母と兄の不幸の原因を明らかにして、特異ともいえるこの作品における母の姿を明確にして、主題に迫ろうとするものである。

「第二章「予覚」する夢に託されたもの―『母を恋ふる記』をめぐって―」は、本作における夢の語られ方を『過酸化マンガン水の夢』での谷崎の「予覚」する夢を参照し

ながら分析し、夢が一貫性をもったものであることを明らかにし、三味線の音とうら若い女の存在の意味を考察して、「私」の心の深部の真実を解き明かそうと試みるものである。

「第三章　『少将滋幹の母』論―＜母恋い＞の語りに秘められたもの―」は、＜母性思慕＞の典型とされるこの作中の「筆者」なるものの位置を確認した上で、「筆者」が捉えた、連れ去られる際の北の方の「躊躇」の意味を作品発表と同時代の風潮を視野に入れて考察し、従来見落とされてきた側面を明らかにするとともに、＜母恋い＞の実質を考察しようとするものである。

「第四章　谷崎潤一郎作品における「不義」の擁護―『少将滋幹の母』を中心として―」は、愛人としての北の方の在り方を明らかにし、「不義」の意味を谷崎の他作品を参照して分析する。さらに、依拠した古典作品から北の方の女性像がどのように変容させられているかを明確にしようとする。

「第五章　『猫と庄造と二人のをんな』論―『改造』に見える婦人問題に関する記事を手掛かりにして―」は、「しつかり者」の女と「怠け者」の男の係わりという視点から、母子関係・夫婦関係の実態を、同じ時期に同じ雑誌に掲載された藤沢恒夫『在る大阪風景』を視野に入れて考察し、本作のテーマの新たな捉え方を試みる。

論文審査の結果の要旨

本論文は中心的な女性存在を＜母性思慕＞の枠組みに囚われずに捉えようと一貫して志す試みであり、まずその発想は評価に値する。第一章では、兄の遺書だけに引きずられるのではなく、語り手「私」の存在を重視する点で、先行研究の不備を補う。また、生に執着する母、息子に裏切られたと思い込む母を焦点化することで従来の固定的な枠組みを揺るがせようとする点で大きな意義を持つ。第二章では、前半部と後半部の差異を指摘し、「私」の見た夢が「予覚」通り一貫したものであるとの指摘も新しい視点である。第三章では、「筆者」という存在を重視し、「北の方」の相反する二面性を提示したり、「北の方」の不義を擁護・正当化していることを示すところなど一定の成果を生んでいる。また「筆者」を滋幹の＜代弁者＞であるとの提起を行い、新たな読みの可能性を試みようとした意欲は評価できる。第四章については、他の男になびく姿を＜淫婦＞と片づけられない側面を浮かび上がらせようと、独自の読みを提示して、新たな議論の呼び水となる可能性を示している。第五章も、従来の視点では取り込まれなかった作品を＜母性思慕＞再考の議論に組み込もうとする意欲は評価されてよい。

しかし、同時に看過できない問題点があることも否定できない。論文全体の趣旨からいって、副題は、「母性」ではなく、「女性」あるいは「母」などとすべきではなかったか。

第二章の「予覚」ということが、当初はどういうことか提示されず、途中になって『過酸化マンガン水の夢』を踏まえていることが明らかにされ、論文の展開として極めて稚拙と言わざるを得ない側面も散見される。

第三章の「筆者」を滋幹の＜代弁者＞とする把握なども、＜傍観者＞との弁別があいまいであり、せっかくの提起であるにもかかわらず、どこまで正確に考え詰めたのかという疑問を抱かせる。

また、全体として『少将滋幹の母』に姦通小説としての先駆性を見いだすことや、『猫と庄造と二人のをんな』を女権拡張の主張に対する批判と見ることは少なからず乱暴な議論と言わざるを得ない側面があると言えよう。

誤植が少なくないこと、引用の仕方が適切でないことも論文の完成度を傷つけるものである。

このように、本論文は、より充実したものへとさらなる努力をすることが強く求められていると言えよう。ただし、これらは決定的な欠陥というものではなく、今後の精進を強く期待したうえで、本論文を博士(文学)の学位に認定できるものと判断する。